

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十二年四月一日発行（毎月一回一日発行）
第十六卷第十二号（通巻第一九二号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

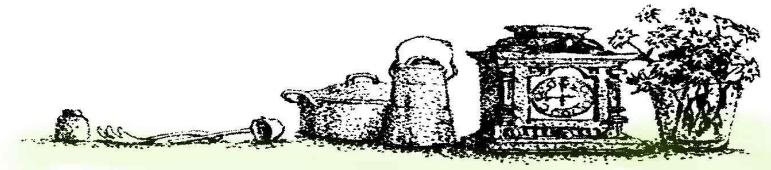
第192号

4. 2010

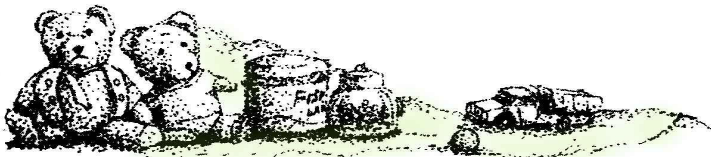
媛の陵

品川 鈴子

半世紀独りで眺め喜寿の花
庭の紅枝垂で足らふ人嫌ひ
遠足の声が先づ着く御陵の丘
母の腿に縋りつき拗ね遠足児



遠足のリュックあづける樹の根方
生垣に赤芽めぐらせ媛の陵
かなぶんが羽の領巾振る妃陵
異人客に税の申告後回し
伊予柑の弥^い瑞々し甘比べ
春愁に稽古の唐手ぶちかます



玉鈴

吟

香川 近藤 倫子

気にかかること持ち越して除夜の鐘
同期とは思へぬ顔も初写真
冬ばらの棘はますます硬くして
ネクタイの一つ結べず成人式
志望校小さく書きて年賀状

兵庫 坂口三保子

満月の月の出迎ふ大つごもり
年賀の児人見知りして大泣きす
這ひ這ひで食卓へ来る年賀の児
年賀の児按摩器ころころ弄ぶ
寒の庭ピンクの木瓜の花盛り

兵庫 佐方 敏明

寒雀柱の蔭に猫匍匐
雪の駅ここよりドアは手動にて
虎落笛閉店多き駅通り
初戎大吉を得る鯛御籤
湖西線雪原に踊る低き虹

東京 佐田昭子

冠雪の富士を従へ機上人
冬風やクルスの海へ鐘ならす
冬の日や廻船問屋の土間かたし
夜神楽の一夜氏子となつてをり
七し五め三引けば高天原に神楽面

兵庫 塩出 眞一

狛犬の阿にも呷にも雪螢
捻り餅作って呉れし杜氏来る
皇帝ペンギン冬將軍を歓迎す
笑む猫のテレビ画面に初笑
若菜摘む矮鶏にも少し与へんと

大阪 島 純子

年忘れ向かう旧道岸和田城
荒神の露店で揃う年用意
暮の墓一族揃い僧笑顔
正月も堺の煙直立す
茜色天神崎に日矢となる

香川 島内 美佳

夫よりも回数多き忘年会
最後には肩組み歌ふ忘年会
人数にピザを切り分けクリスマス
餅搗の順に打ち込む杵三つ
風邪をひき夫婦の絆再確認

大阪 島本 知子

帰路急ぐ母子を見守るオリオン座
二日から缶を集める男達
初売りを待つ客ぐるりと店囲み
福袋二つも持つて初詣
謙虚ゆえ吉で十分初御籤

愛媛 鈴木てるみ

負け癖のつきたる力士暮の場所
会計の合わずじまいの忘年会
極月の入院に部厚き漫画
血圧を聖菓の紙の裏に記す
踏拳道顔に怪我する寒稽古

大阪 鈴木 浩子

柚子の香にまみれて夫のジャム作り
秒読みの冬木の灯入れ市長待つ
学童の漣く高野紙ハガキ大
注連縄ひし父の不器用見直せり
夫の辺に感謝てふ字を筆始

香川 陶山 泰子

寒月に打つ返信のなきメール
謎一つ解いてもらい囲炉裏端
五人目も男なりけり年賀状
ポケットのボタン取り出し縫始め
女正月国の未来の話など

岡山 瀬口ゆみ子

雪しまき天橋立切れ切れに
新春の俳誌携へ湯治客
積む雪にしなやかなれと独り言
瑞鳥の飛翔を待ちて悴めり
誰がために編んで解いて毛糸玉

兵庫 高橋 大三

パソコンで賀状を刷れば上下逆
獅子舞の後足で立ち丈六に
獅子舞より屋台ラーメン欲る幼
初春に選外の句も評し合ふ
駆けつこでいつも登校息白し

愛媛 武司 琴子

まな板の七草の芽の立ち上がる
初電話クラリネットの音交じる
鈴響く子安大師のお元日
外つ国の人も二拍手初詣
マニキュアに劣らぬ艶よ薺爪

薬草歳時記

(二九二) カラタチ (枳)

菅原 由紀

墨東や花からたちに雨あがる 角川 源義

「からたちの花が咲いたよ 白い花が咲いたよ からもちも秋はみのるよ まろいまろい金のたまだよ」

北原白秋のからたちの花の詩が印象に残る。大正十三年(一九一四)七月に「赤い鳥(鈴木三重吉)」に発表。山田耕筰作曲の唱歌として愛唱されている。

からたちはかつて生垣としてどこにでもみられた。落葉低木で高さ二メートル位、枝は緑色で長さ五センチ位の長い刺が互生。春、葉に先立って白い大きな花が咲き美しい。秋には球形のみかん状で直径三センチ位の実がなる。その実は苦くて食べられない。濃い緑から黄色に変化する。

漢方ではからたちの未熟な実を二から四に割り乾燥。枳殼、枳実という。芳香性があり健胃、利尿に利用する。本来枳殼の良品は橙の未熟果を乾燥させたもの。成分はヘスペリジン、リモネン、リナロール、シトラール、ナリンジン、ウンベリ

フェロン等。

枳は中国原産で古くから日本に伝わっていた。万葉集にも一首読まれているが、刺があることから嫌われていたらしく、美しい歌ではない。

現代になって、白秋や三木露風の作品に美しく歌われている。

齊藤茂吉の作品に「からたちの素朴の花をあはれがる空襲のあとにわれは来りて」と、昭和二十年の東京の空襲のあとの残る風景を読んだものがある。

枳はみかんや橙の土台として接木される。柚子も枳に接木したものを接木柚子という。(ぐろつけ一月号より)

からたちとは唐の国から渡来した橘という意味から名付けられたとか。

福岡大宰府天満宮の奥の脇に中島神社なかつまという小さな社があり、かつて遠く唐から枳を持ち帰ったという但馬守(田道間守)を菓子の先祖としてまつている。全国から多くの菓子職人、パテシエの人達がお参りして守っているそうだ。

参考文献 「明治書院 歌の花 花の歌」久保田淳著 三品隆司画

「中薬大辞典」 小学館

「東洋医学 漢方解説」学研

著者略歴 神戸薬科大学卒、薬剤師

カラタチ (キコク・ゲズ) [カラタチ属] (みかん科)

Poncirus trifoliata (L.) Rafin (*Citrus trifoliata* L.)

枳殼 (中) 枸橘 (英) Trifoliata-orange

須賀悦子画



花: 大型白五弁花

花期: 4月~5月



液果

薬用部分: 未熟果実 (枳実 <キジツ>)

E.S.

枳殼のとげは痛かる潜る猫	十代は遠し枳殼の花白し	からたちの花高かりし少年期	関帝廟花からたちの匂ひけり	からたちは散りつゝ青き夜となるも	雲低き野路からたちの花匂ふ	時刻表にはさむ枳殼のこぼれ花	からたちの咲く頃は雲浮き易し	からたちの花より白き月出づる	からたちの花のほそみち金魚売
* 八木 紀子	* 北畠 明子	鷹羽 狩行	松崎鉄之介	藤田 湘子	篠田 麦子	横山 房子	栗原 半作	加藤かけい	後藤 夜半

(* ぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

三匹の猫と戯る女正月 東京 静 寿美子

病名を告げられてゐし寒の雨

介護士の声とらかに福寿草

凜として白寿の媪 初点前

老い急ぐ犬を励まし年明け

子ともめる年越蕎麦のゆで加減

床暖房犬と同じ視線なる

寝正月顔の揃ふは夕つ方

漁港にも城の堀から冬の鷺

初電話せがむ声して児と替る

飯蛸の墨ぬく男慣れたもの

新年会ピンゴゲームに声とびて

あるがままを美学となせり枯櫛

木の葉髪言わずもがなを聞かざる

納天神炎高々絵馬焚かる

嫂のひとり暮しの冬菜畑

五十余年B5のノート初日記

兵庫 吉田 耕人

地酒屋蘇地ものの御節湯治宿

追試験いつ睡るやら夜学生

初詣球児一気に駆け登る

三ヶ日過ぎ洗濯機回り初む

朝湯してくつろぐ主婦の小正月

小犬呼ぶ少年の声凍てし野に

病室のカーテン替えて春めけり

左義長の炎空へと龍のごと

初蹴りに鈴一打して出て行けり

初曆まず孫達の誕生日

子の歳暮頭もついた鶏一羽

佗助のつつましく咲き寅の年

子ら去りて部屋広々と松の内

新しき紅くつきりと初鏡

こじゆけいの羽音の響く初御空

ひいばあちゃんの顔がたがたと初笑

九十二才よくぞ生きけり針始

大阪 八幡 操

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子評
四句〜十五句 古井公代 〃

*選句は全て 品川鈴子

三匹の猫と戯る女正月

静 寿美子

ペット好きには、概して猫派と犬派があり、おのずと飼
い主のタイプもペットに似通う。日頃は何かと雑用に追わ
れて、ゆつくり遊ぶ暇もないが、せめて女正月くらいは、
三匹の夫々違った性格の猫と接して和む。何故かふと谷崎
潤一郎の「猫と庄造と二人の女」を連想。

寝正月顔の揃ふは夕つ方

前田 玲子

新年のすごし方は寝正月の骨休めも名案。家族の顔が揃
うのは、淑気の時も過ぎ去る夕方頃。誰もが充分の睡眠を
とったあと、機嫌佳く寛いで食卓を囲むと、ほんとに健全
な家族像で、これが主婦の喜びというもの。

飯蛸の墨ぬく男慣れたもの

四葉 允子

飯蛸が米粒のような卵をぎつしり詰めて店頭に現れる
と、いち早く春の訪れを知る。素通りできずに山盛り求め
てから、墨抜きの手間に気付く。脆い墨袋が破れぬよう一
尾ずつ墨袋を除くのだが、たまにしくじると流し台は墨だ
らけ。でも明石の魚の棚では店先で漁師風の男がビニール
手袋を被て、見る間に捌いてくれる。

嫂のひとり暮しの冬菜畑

荒木 稔

老いてひとり暮らしをしている嫂が気懸かりで訪ねた作
者。嫂の畑を見て安心しました。大根はじめ葱、白菜、冬
野菜が元氣よく育っています。気丈夫で足腰もまだまだ達
者な嫂さんに逢って、自慢のお野菜をたくさんいただいた
事でしょう。

五十余年B5のノート初日記

吉田 耕人

半世紀日課として続けられたとは、強い意志と誠実のお

人柄です。故にこだわりもあります。物にも相性があって、作者はB5ノートが大好き、相性が良いのです。これからも変える事はありません。まっ白なページに初日記は何を書き記しましょうか。

朝湯してくつろぐ主婦の小正月 深沢 和江

暮れから正月と慌ただしかった日も過ぎ、静かな小正月。朝湯に浸ってリラックスです。身体の芯から疲れがほぐれます。『あゝいい気持』至福の時を味わう作者の御満悦。小正月に朝湯をとほ粋な趣向ですね。

子の歳暮頭もついた鶏けい一羽 中井 光子

鶏丸ごと扱われる事の出来る作者は、相当の料理の達人です。親孝行の息子さんはちゃっかりと材料を送ってきました。「お母さん遊びに行くからね〜美味しいローストチキン作ってね。今年もお世話になりました!!」ということでしょう。「まあ大変」と苦笑いしながらも、まんざらでもない作者。

佗助のつつましく咲き寅の年 堀口香代子

寅の年が明け静かなお正月に佗助も咲きました。年賀状で威勢の良い虎を多く見たせいか、俯きながら楚々と咲いている佗助がなんとも奥ゆかしく、つつましく映りました。平穏な日々を願う心が伝わります。

ひいばあちゃんの顔がたがたと初笑 八幡 操

顔がたがたの表現はユニークです。この言葉でお年を召したおばあさんの顔が全て理解できます。囁れ声も聞こえます。大家族のお正月は賑やか、わけても長老の作者は家族の要で、中心人物です。そんな作者は幸せ、うれしくてくく笑いが止まりません。つられて周りの人も笑います。明るい御家庭です。

きりきりと頬打つ北風窓灯り 井上あき子

冷たい北風の中、外出先からの帰り道、はやあちこちの窓が灯りはじめました。夕食のお菜は何にしようかしら？主人はもう帰っているかしら、犬の散歩もしなきゃならないし…。日が短くなつて心急ぐ主婦の心情が出ています。

(以下略)